○不動坊と静馬

昔、船岡の一の渡に八兵衛という家があつた。この家のかかり人に、上方流れの「静馬ヤッコ」という五尺たらずの小男がいた。静馬は小男であつたが、なかなか喧嘩早かつた。

ある日、主人の用で久保田の城下へ赴く途中、和田の宿場にさしかかつたら、気のあらい馬方達二、三人が、なんのかのと喧嘩を吹きかけてきた。しかし小男と思い侮つてかかつた馬方達の方が忽ち静馬に手玉にとられてしまつた。静馬は勝つたものの、帰りに必ずしかえしをされると思うと不安でたまらなかつた。町に入つたら思いもうけず村の山伏不動坊にであつた。静馬はこれ幸いと、和田でのできごとを語り、助勢をたのみ用事を終えて帰途についた。

果して、和田近くになると、見はりの者までいるという用心さ、これにはさすがの静馬も驚き、不動坊のあとについていくと、町角から七、八人の大男が手に手に棒をもつて打ちかかつてきた。これを見た不動坊は胸に手をくみ、口になにやら呪文をとなえたかと思うと、不思議にも馬方達は五体がすくんで、手をあげたものはあげたまま二進も三進も動けなくなつた。二人は微笑しながら置き人形のようになつた間を悠然と通り過ぎた。これをみていた町の人達もただ驚くばかりだつた。だが驚きはそれだけでなかつた。それは家々の台所の炉にかけてあつた夕餉の飯鍋が、水でも注がれた如く煮えたつことをやめてしまつた。

こうして二人が、宿場の外れの五右エ門坂にかかろうとしたら、「まつてくれーつ、まつてくれーつ」と叫びながら町人達が大勢追つてきて、船岡君ケ野の修験者とは露知らず、馬方どもが失礼なことをして済まなかつた。どうかあの動かない馬方どもをもとどおりにしてくれと願うのであつた。それを聞いていた不動坊は哄笑し、「もう今頃は家に入つて働いているだろう。飯もできた頃だ」というので、町の人達は厚く礼をいつて帰つた。帰つてみると山伏のいつたようになつており、宿人達はただただ驚くばかりであつたという。

（船岡）